

五条地区の遺跡

—五条地区の古代・中世—



空から見た五条地区（東から撮影）

2002
太宰府市教育委員会

1. 五条地区の位置

五条地区は、太宰府市内の東部にあります。付近には商店街をはじめ大学や短大が集まっているため、太宰府天満宮周辺とならび市内でもっとも人の往来が多いところで、西鉄五条駅は、朝夕、学生の列であふれています。

遠い昔、古代・中世の五条地区も、人の往来が多く、栄えたまちだったことが次第にわかってきました。

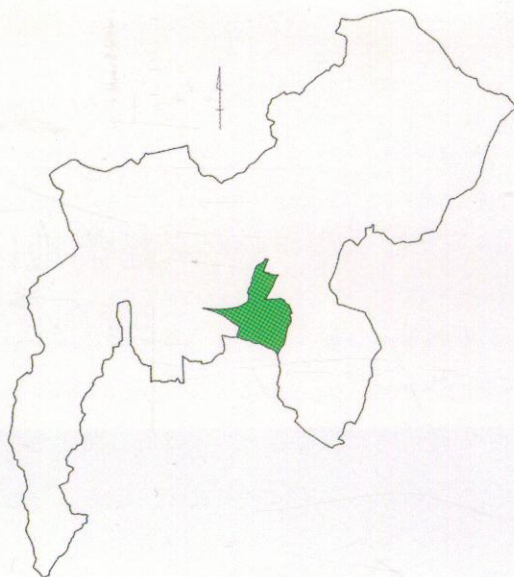
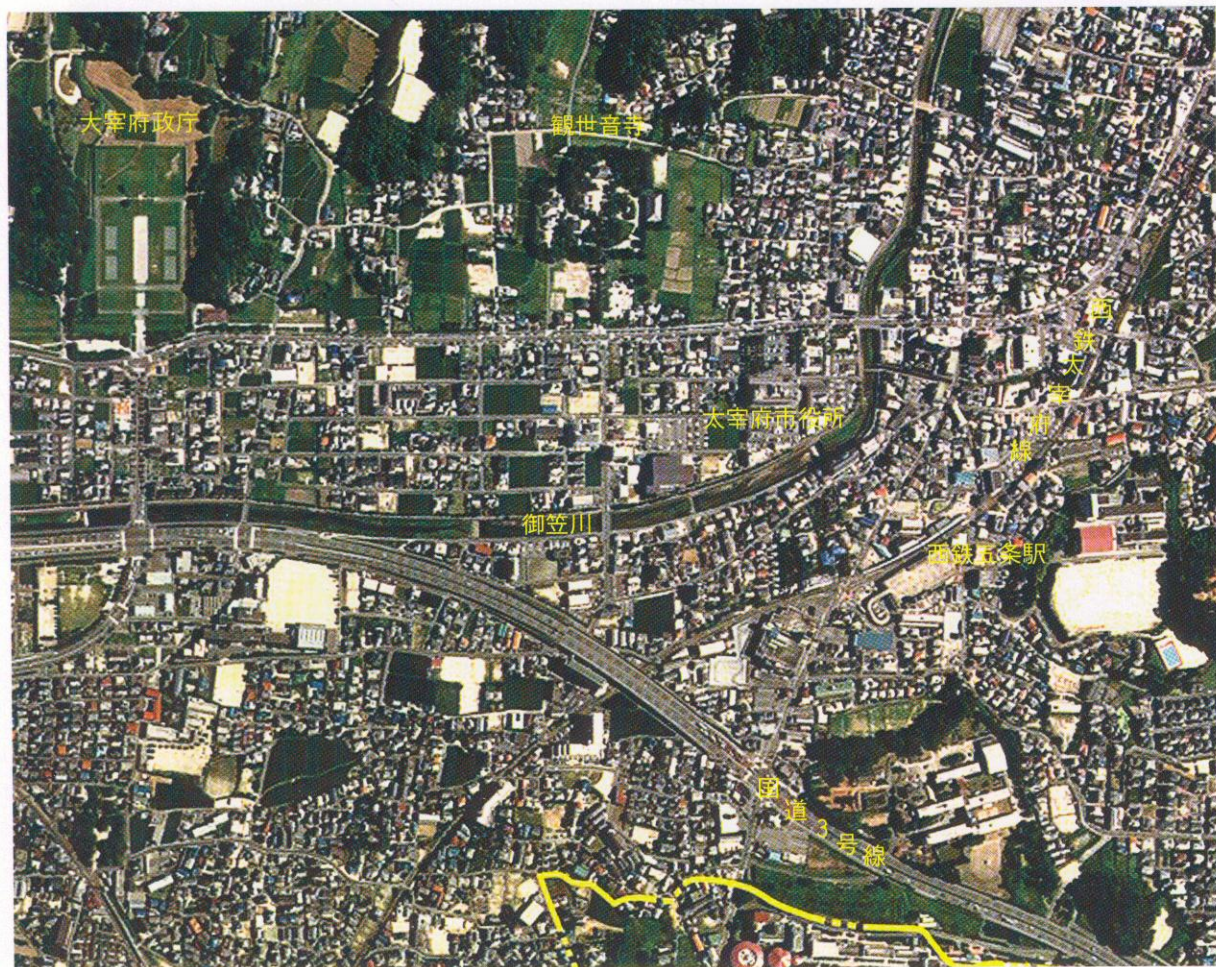


図1 五条地区の位置



五条地区の航空写真

2. 大宰府と大宰府条坊

7世紀末頃に九州の9国2島管轄と外交機能ももった「大宰府」という役所が置かれました。大宰府政庁は奈良時代はじめ頃に建てられ、大宰府政務の中心でした。

大宰府政庁の南の平野部には、古代都市がつくられています。歴史書『続日本紀』には、神護景雲3年(769)年10月の大宰府の言に「此府、人物殷繁。天下之一都会也。」とあり、当時の繁栄ぶりをうかがうことができます。また発掘調査でも街区が広がっていることがわかってきました。

平安時代中頃になると、大宰府に関する古文書に「条・坊」「右郭司」「左郭司」などの用語が登場するようになります。これより都に似た碁盤目の都市区画があったと考えられるようになりました。これを「大宰府条坊」と呼んでいます。

五条地区は、大宰府条坊の東部に位置しています。

<用語の説明>

条坊 条・坊は、都城の街区画を表す言葉で、条は南北の区画を、坊は東西の区画を表します。条は、街区の北から1条2条と数え、坊は政庁から南にのびる中央大路に近い区画から、1坊2坊と数えます。

この区画の境には道路が通っており、東西道路を条路、南北道路を坊路といいます。

また、区画内にも小道があり、坊間路などによんでいます。

街区の呼び方 古代の街区は、大宰府政庁の上で南を向いた状態が基準となります。このため、東側の街区は左郭といい、西側の街区は右郭といいます。



図2 五条地区周辺地図と大宰府条坊復元(案)

3. 文献・古図等に見る五条地区

実は、古代都市大宰府条坊の範囲を考える上で重要なヒントが、この五条地区の歴史にのこされています。

五条地区には、宇佐神宮（大分県宇佐市）と関わりがあったことを示す伝承があります。またこれを裏付けるような古文書ものこっています。

元九州大学教授の鏡山猛先生は、この宇佐神宮の歴史書、『宇佐大鏡』^{うさおおかがみ}に記された久安^{きゆうあん}4年（1148年）の「府中宇佐町」^{ふちゅううさまち}の記事に注目されました。

「府中宇佐町」は、大宰府条坊内にあった宇佐神宮にゆかりのある場所で、平安時代後期には、28の家があったと記されています。

この記事の内容を要約すると、次のようになります。

『「府中宇佐町」は大宰府条坊の左郭7条12坊にあり、この土地の範囲は次のようになっています。』

東は、京極大路で限る。（←「京極」とは都城（京）域の端を意味します。）

南は、田で限る。

西は、馬出子午小道で限る。（←「子午」は南北を意味します。）

北は、馬場で限る。

この土地は宇佐神宮の大宮司が購入した土地で、後に宇佐神宮の土地となりました。

今、この土地の南の藪^{その}を平野社（大野城市牛頸所在の平野神社か？）が奪い取ろうとしています。過去にも、大山寺（宝満山麓の大寺院）が奪い取ろうとしましたが、大宰府の役所に申し出て、宇佐神宮の土地と認めてもらいました。今回も平野社に対して、同様の判断をしてもらいますように。』

これに対して、大宰府は、宇佐神宮の意見を認める判断をした。

ここでわかる重要なことは、「府中宇佐町」が所在した左郭12坊は、東側が「京極」^{きょうごく}の大路に接していたということです。

このことから、左郭12坊は、平安後期の大宰府条坊の東の京極、つまり大宰府条坊の最東端だったということがわかります。

これをもとに鏡山先生は、大宰府条坊は東西ともに12坊づつあったという想定をなされています。



図3 府中宇佐町の四至

また、この記事には、ほかにも地名が登場します。

「馬場（ババ）」や「馬出（マイダシ）」といった名称がこれにあたります。

江戸時代の太宰府一带に残る地名や伝承を記した『太宰府旧蹟全図』北図（文化3年（1806年））をみると、五条付近に、「ババ」や「マイダシ」といった地名が記されています。こうした地名がこのころにも伝えられていたのでしょうか。

このほか、現在でも太宰府中学校内に宇佐八幡の祠が安置されるなど、五条地区と宇佐との深い関わりをうかがうことができます。

なお、『宇佐大鏡』の「府中宇佐町」の記事は大宰府条坊について記した最後の文献で、平安時代のおわりとともに古代都市「大宰府条坊」も終わったと考えられています。

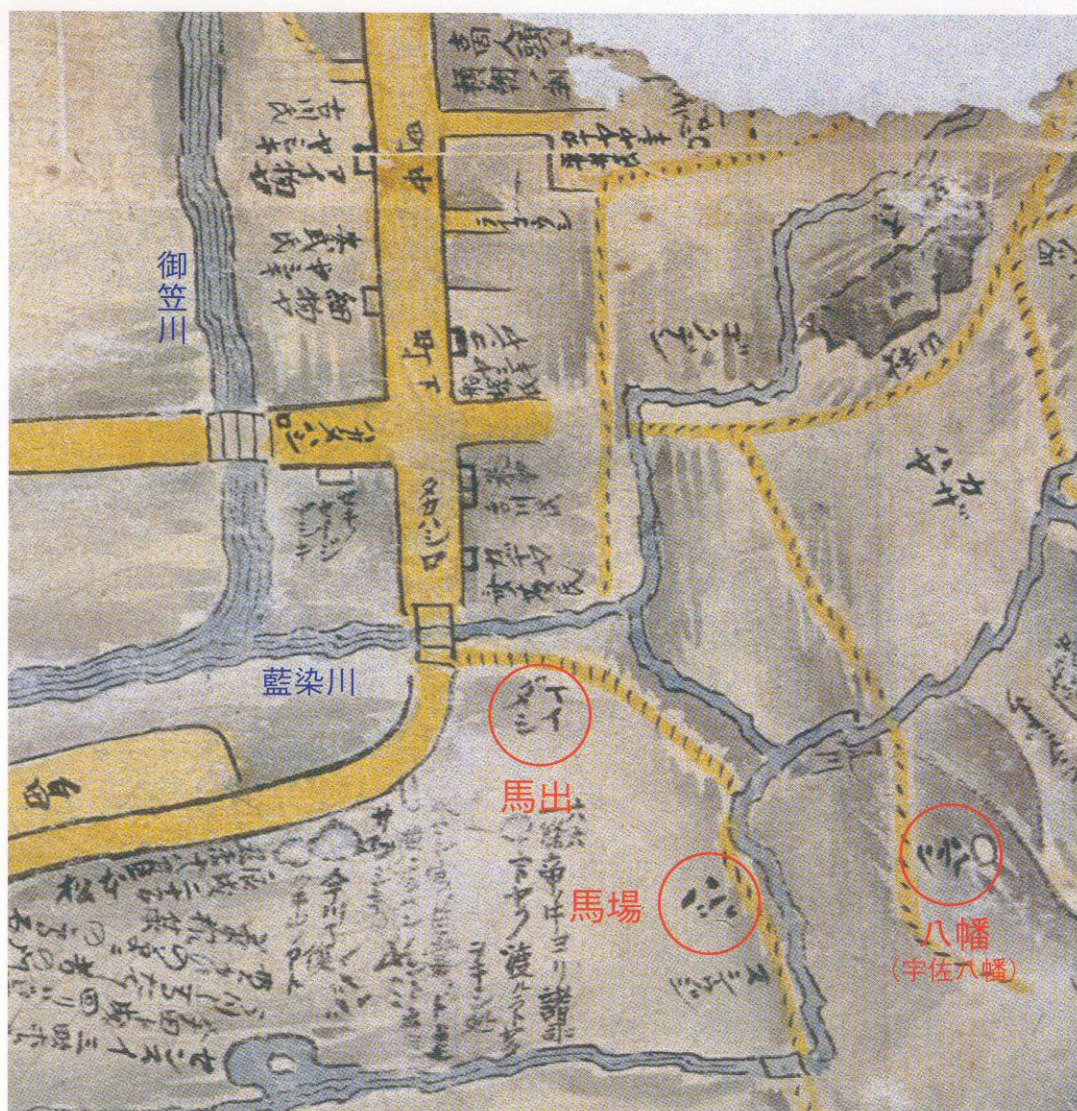


図4 『太宰府旧蹟全図』北図にみる地名（一部改変）

4. 発掘調査でわかった古代のようす

五条地区でも発掘調査がすすみ、古代都市（大宰府条坊）のようすが次第にわかってきました。

大宰府条坊跡第157次調査

現在、西鉄五条駅舎の西隣には自転車駐輪場が建設されていますが、ここを建てる前の調査で、道路跡がみつかりました（下の写真）。

ここは道路の交差点にあたり、道路側溝がL字に折れ曲がっているようすが確認されています（写真下側の溝）。みつかった道路側溝は奈良時代初めに埋まっていた。それ以前に道路側溝が掘られたことを考えると、これに伴う古代都市の街区が奈良時代初めより以前に成立していたこととなります。古代都市の成立時期を知る上で貴重な事例です。

大宰府条坊跡第217次調査

これは西鉄五条駅の北約200mでの調査で、五条の^{こうしんとう}庚申塔がある場所です。ここでは、平安時代後期の^{さかく ほうろ}左郭12坊路とみられる南北道路がみつかりました（右ページの写真）。

『^{うさおかがみ}宇佐大鏡』の「^{ふちゅううさまち}府中宇佐町」の記事にみる「^{きょうごくおおじ}京極大路」と時期も同じで、まさにこの道路だったと思われます。

この南北道路は、12世紀中葉～後半頃に付け替え工事がなされ、また東にのびる道路が新設されたこともわかりました。



奈良時代以前の道路と交差点（上が北）



推定左郭12坊路 青線は古い道路の側溝、白線が新しい道路の側溝です。(上方が北)



新道路の側溝に立ってもらいました。路面はすでに失われています。(南から撮影)

5. 府中宇佐町はどこに？

これまでの発掘調査の成果をもとにして大宰府条坊を復元すると、条坊一区画の一辺が90m程度だったと考えられるようになりました。

ところで、大宰府条坊について記した『観世音寺文書』の、長徳^{ちやうとく}2年（996年）7月25日の記事から、観世音寺大門（南大門）が左郭4条7坊に位置していたことを知ることができます。

この記事をもとに、復元図と重ねると大宰府条坊内の土地の位置関係がわかります。（p2の復元図をご参照ください）

平安時代後期に大宰府条坊内にあった「府中宇佐町」は、「左郭7条12坊」の中にあつたことを述べましたが、そうすると、西鉄五条駅北側に「府中宇佐町」があつたことになります。

西鉄五条駅北側を整備する前におこなった発掘調査（大宰府条坊跡第158次調査）では、右の写真のような、平安時代後期の建物や井戸がみつかりました。これらは「府中宇佐町」のもの、あるいは隣接した土地のものと考えられます。



西鉄五条駅前（平成14年2月撮影）



平安時代後期の井戸跡 中央に桶をすえています



平安時代後期の建物跡 柱穴に立ってもらいました

6. 発掘調査でわかった中世のようす

中世になると、五条地区には新たな街区がつくられました。この街区は古代の大宰府条坊の街区をもとに造られ、鎌倉時代中頃～後半にその最盛期をむかえたようです。

大きな堀で土地を区割りし、そのなかに建物や井戸がたくさんつくられたようですが、西鉄五条駅周辺の発掘調査で明らかになりました。

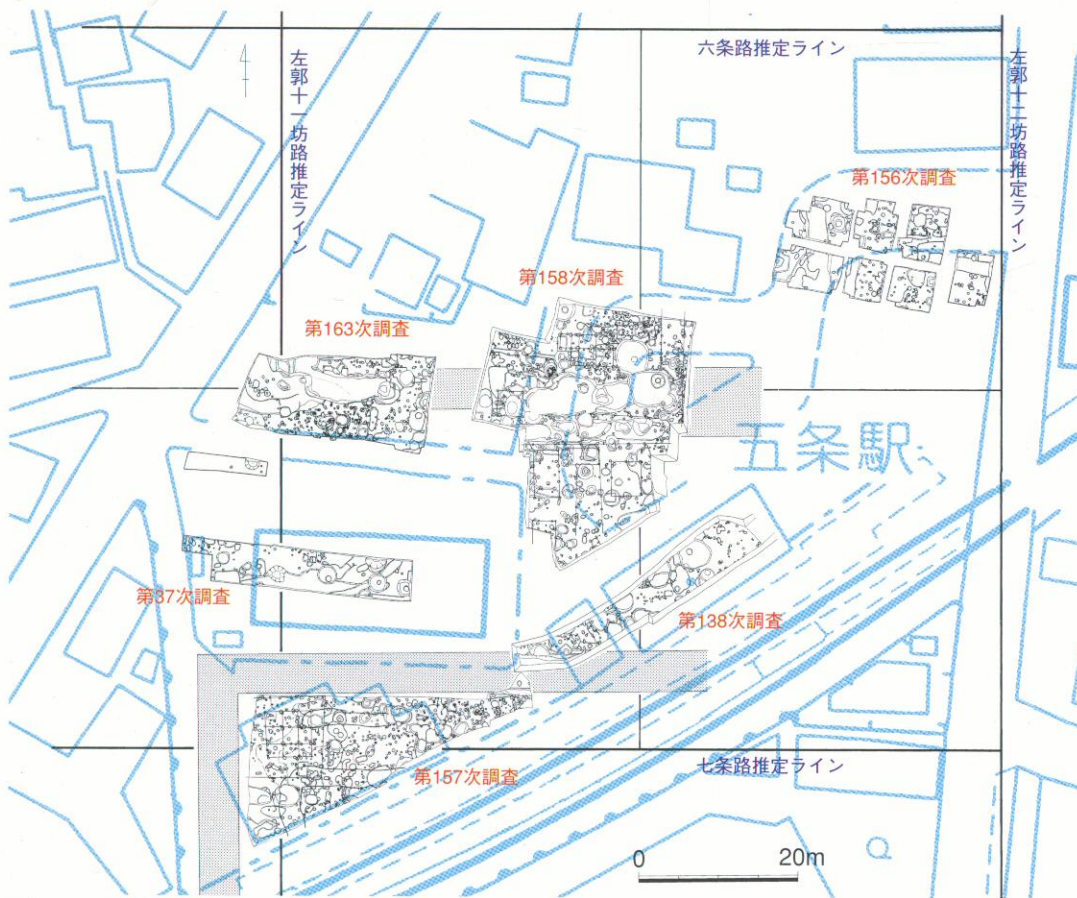


図5 五条駅北側の調査でわかった中世の街区割り（網目は中世の区割、線は古代の大宰府条坊の設計線）



建物跡



井戸跡 3つの井戸がみえます

また、五条駅北側の調査では、土地を南北にわける東西に走る溝の中から、多量の器がみつかりました。

そのほとんどが土師器^{はじき}とよぶ素焼き^{すや}の器で、坏^{つき}・小皿といった食器に相当するものばかりで、溝の中に何層にもわたって捨てられていました。

その量は、総計でパンケース80箱におよぶもので、総重量1～2トン程度は十分にあるようです。

「かわらけ」と呼ばれるこのような土器は、饗宴^{きやうえん}などで使われたのち、すぐに捨てられたと考えられています。数点～数十点の土器^{はいき}が廃棄されているのは各地でみつかりますが、このように多量の廃棄跡はなく、鎌倉や博多など、当時の大都市といえる地域でしかみつかりません。

このような大量土器廃棄は、中世太宰府の繁栄ぶりを語るにふさわしい遺構^{いこう}といえます。



土器廃棄のようす



完全な形でみつかった器も数多くあります。

7. 中世の鋳物工房

西鉄五条駅の北東250mには、金属を型に流し込んで製品をつくる^{いもの}鋳物工場跡が見つかっています（^{ほこ}鉾^{うらいせき}ノ浦遺跡）。

五条駅周辺でみつかる中世の街区とはほぼ同時期（鎌倉時代後半頃）にあった工場です。ここからは、金属を溶かす^ろ炉のあとや金属を流し込んだ^{いがた}鋳型などが見つかっています。

（詳しくは、目を見る太宰府市の文化財4『鉾ノ浦遺跡－中世の鋳造工房－』をご覧ください。）

8. 中世の墓地

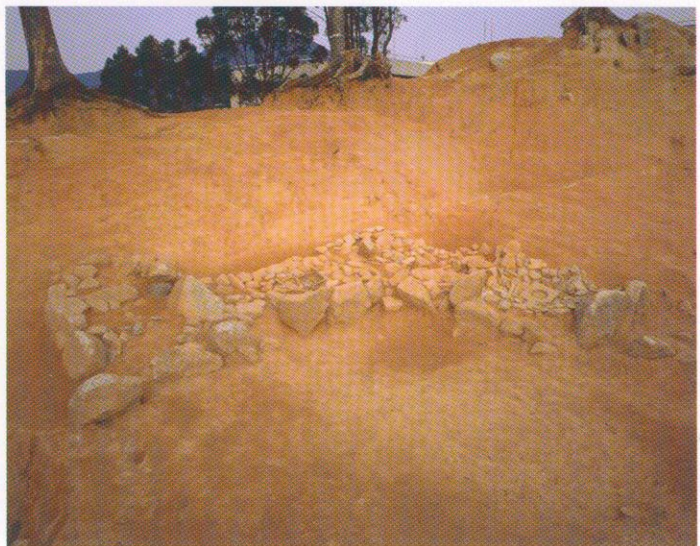
西鉄五条駅の東400mの丘陵上には、中世の墓地が築られました。墓は方形に大きな石



を組み、中に小さく平たい青石（緑色片石）を敷いたもので、南側を向いて並んでいました。墓の中央上面には、土製（瓦質）の^{ごりんとう}五輪塔が大小2基並んでいるのもありました。土製の五輪塔は、国内でも類例が少なく、非常に珍しいものです。

方形石組み墓

中央に五輪塔が据えられていました



高台の南向きに墓が並んでいました

9. 近世の構口^{かまいぐち}

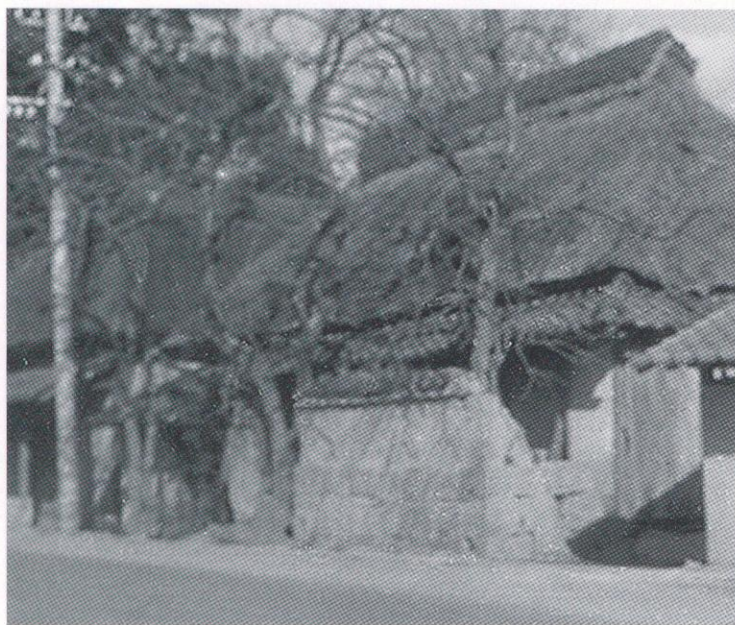
構口^{かまいぐち}とは、江戸時代、宿場の入り口に設けられたもので、石垣と瓦葺きの土堀からなる筑前の宿駅独自の施設でした。現存しているものは長崎街道の山家宿（筑紫野市山家^{やまゑ}）でみることができます（筑紫野市指定文化財）。

ここ宰府宿には4カ所の構口^{かまいぐち}があり、五条地区には五条交差点の西側（高橋構口：現在の筑紫農協ガソリンスタンド付近）と五条交差点の南側（五条構口：『太宰府旧蹟全図』は「タカハシ口」とある）がありました。

大宰府条坊跡第217次調査では、五条構口の東側の石垣基礎が見つかりました。上部は消失していましたが、石組みが2段検出されました。昭和30年代まで上部が残っていたようです。



五条構口の石垣基礎（北西から撮影）



昭和30年代の五条構口

（南西から撮影）

石垣の上に瓦葺きの白壁の堀がありました。

（吉塚太喜雄氏提供）

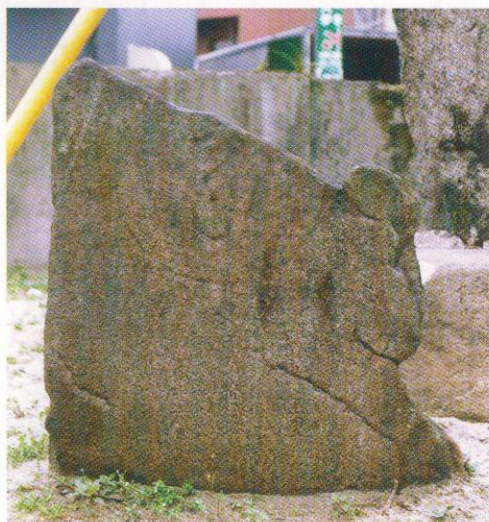
10. 中世の板碑（石造物）

五条構口^{かまいぐち}の横には、いつの頃からか、石造物が置かれました。最も大きな石造物は「庚申天」と記されており、五条の庚申塔^{こうしんとう}として知られています。

その脇にある板碑^{いたび}と呼ばれる石造物を調査したところ、前面に文字が刻まれていることがわかりました。

そこで拓本^{たくほん}をとると、文字が浮かび上がってきました。

文字は次のように刻まれていました。

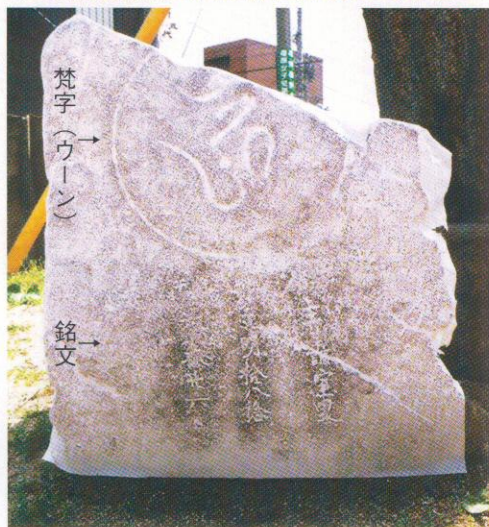


【銘文の文字】			
午□	□	□	主
□	□	□	室
□	文	明	叟
廿	拾	八	
六	稔		
日			

ここには文明^{ぶんめい}18年（1486年）の年号が刻まれていました。なんと500年以上も前の戦国時代の板碑ということがわかったのです。この時期に建てられたことがわかっている板碑は、県内でも少ないようです。

中央にはウーンという強力な力をもった仏を表す梵字^{ぼんじ}が、その下に銘文^{めいぶん}が刻まれています。右の行には願主（あるいは施主^{せしゅ}）の名前とみられる文字があり、中央に板碑が造られた年号、左の行には月日が記されています。

板碑を建てた理由は文面からはうかがうことができません。ただこの頃、筑前を支配していた少貳氏^{せうじ}は去り、山口の大内氏が太宰府に勢力をのばすなど、混乱の時期にありました。板碑の願主（施主）は、強力な力をもった仏にすがり、平安を願ったのではないのでしょうか。



拓本をとったところです

11. 五条地区周辺の遺跡・文化財散策マップ



①三浦の碑
天満宮参拝のみそぎの場でした



②高橋構口
博多方面からの宰府宿の入口です



③五条構口
二日市宿など、南からの宰府宿の入口です
p11をご覧ください



④庚申塔と文明18年板碑
p12および裏表紙をご覧ください



⑤推定左郭12坊路（平安時代）
p5をご覧ください



⑪奈良時代の交差点
p5をご覧ください（上が北）



⑫鎌倉時代の土器廃棄
p9をご覧ください



※ 太宰府市内の街並みもずいぶん変わってきましたが、いまでも地形などから古代の街区の面影をうかがうことができます。赤字は大宰府条坊推定ライン上にある、現在の地割りです。
※ 五条地区には文化財や伝承地が点在しています。見学の際は、地域の方々への配慮をお願いいたします。
※ なお、市内文化財や伝承については、インターネットでも公開しています。
(大宰府博物館ホームページ: <http://dazaifu.mma.co.jp>)



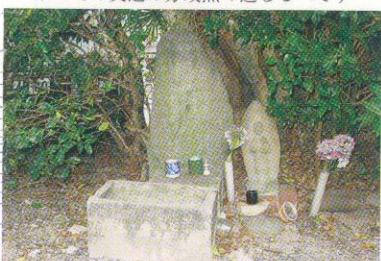
⑥金掛梅
家財を投げだして飢饉を救った
古川家の伝説があります



⑦藍染川
染河、思川などといい、歌に詠まれました
伊勢物語にも登場する有名な川です



⑧梅大路道標
かつての交通の分岐点の道しるべです



⑨血方持さま
婦人病に霊験があるといわれていました



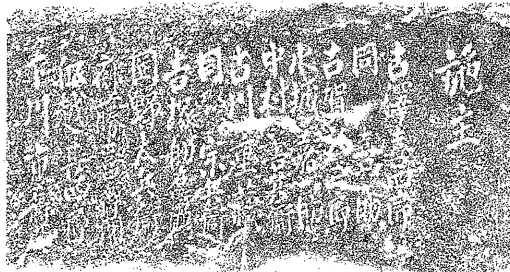
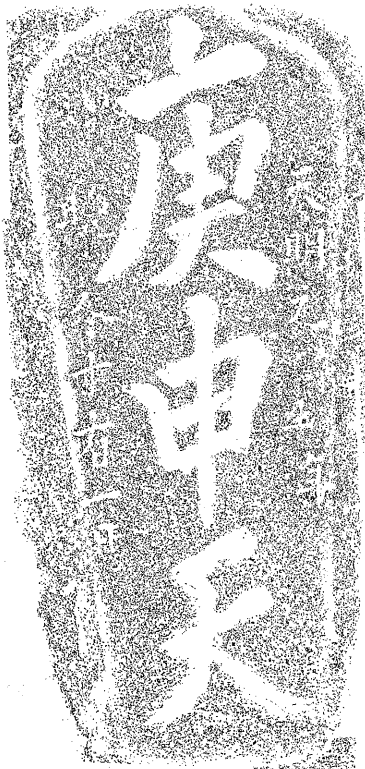
⑩月見山
付近は、室町時代の九州探題、今川了俊の
館や庭園があったといわれています



⑬山伏の墓
修行中に亡くなった山伏の墓と
伝えられています



⑭宇佐八幡祠
p4などをご覧ください



五条構口の庚申塔

中国の道教の考えでは、60日に一度巡ってくる庚申^{かのえざる}の日の夜に、人間の体内にいる三尸^{さんし}という虫が、人間の眠っている間に人体を抜け出して、天帝にその人の罪や過ちを報告し、これによって健康や寿命が決まるとされていました。そこで三尸^{さんし}に天に行かせないために庚申の夜は眠らず、行いを慎み、健康長寿を祈りました。これを「庚申待^{こうしんまち}」といい、ここで石塔をたてたのが庚申塔^{こうしんとう}（庚申待供養塔）です。

五条構口^{かさいぐち}の横にも、天明元年^{てんめい}（1781年）12月11日にたてられました。このころ市内各所で庚申塔がつくられています。

この庚申塔は、石塔と台座に分かれており、総高2mにもおよぶ大きなものです。塔の台座には、施主^{せしゅ}（この塔をたてた人達の名前）12名が刻まれています。

「庚申^{かのえざる}」は、つまり申であるため、日本古来の道祖神の猿田彦^{さるたひこ}と同義と考えられ、辻や村境などに庚申塔が建てられることが多かったようです。このため、この庚申塔も宰府宿の入り口である五条構口に建てられたのでしょう。

本紙執筆・編集： 井上信正

目で見える太宰府市の文化財 5

五条地区の遺跡

—五条地区の古代・中世—

平成14年3月31日

編集・発行 太宰府市教育委員会文化財課
太宰府市観世音寺1丁目1-1

印刷 (有)システム・レコ